



一休と中国の詩人たち（王安石）

稲田浩治

北宋の王安石（一〇二一—一〇八六）は、政治家にして詩人、文章家、禪への造詣も深かった。撫州臨川（江西省）の人。字は介甫、半山と号し、王荊公とも臨川先生とも称される。唐宋八大家の一人で、詩文集『臨川先生文集』一〇〇巻がある。

慶暦二年（一〇四二）二十二歳で進士に及第したが、中央政界への進出を望まず、地方官を歴任し、その間に人民の悲惨な生活をつぶさに見た。「一民之生重天下（一民の生天下に重し）」（「収塩」という詩句は、この頃の体験から生まれたものであろう）。

熙寧元年（一〇六八）国家の革新を目指す神宗が即位すると翰林学士に拔擢され、翌年には参知政事（副宰相）に任命された。時に王安石四十九歳、自らの理想を実現すべく政治改革に着手した。まず制置三司条例司（審議機関）を設け、新政策の立案を命じた。当時国家は、対外的にも内政的にも危機的な状況にあった。国家財政の再建、人民の生活安定は急務であった。

熙寧三年（一〇七〇）同中書門下平章事（宰相）となった王安石は、

いわゆる「新法」と呼ばれる「均輸法、青苗法、市易法」などの新政策を次々に断行した。しかし、王安石らの新法党は、保守的な旧法党との闘争に敗れて挫折した。従来利益を独占していた豪商や大地主、高級官僚らが猛烈な抵抗を示したのである。

熙寧九年（一〇七八）王安石は宰相を辞し、晩年は江寧（江蘇省南京）の鍾山に住み、悠々自適の生活を送った。

一休には王安石を詠じた詩が三首ある。連作の賛詩で、『狂雲詩集』に収められている。

賛王荊公 三首

鍾山霜竹雪筠箴

有客門前幾汗淋

誰識殘生吟興味

一身投老價千金

起句・承句は、宋代の禪僧^{かくはんえん}覺範慧洪（一〇七一—一二二八）の談話を集録した『林間録』の、次の逸話に因る。

王文公方大拜、賀客塞^レ門、公默坐甚久、忽題^レ于壁間、曰、霜筠雪竹鍾山寺、投^レ老歸歎寄^レ此生。（『國譯禪宗叢書』）

——王文公（王安石）が宰相に就任した時、祝賀の客が家に押し寄せて来た。その時、王文公は長い沈黙の後、「霜や雪におおわれた竹が林立する鍾山寺に、年老いたら帰ってこの命を託そうかな。」という詩句を壁に書き記して平然としていた。

一休はこの逸話をもとに、新宰相の歎心を買おうとした祝賀の客が、軽くないなされて己の下心を恥じるといふ図を描いた。起句の「歳」は、教えとか教訓の意。結句は、王安石が年老いてから鍾山に身を置いて、詩の世界に遊んだことを指すのであろう。

——王安石の「鍾山霜竹雪筠」の詩句には、門前に押しかけた客人たちは、どれほど冷や汗をかいたことだろう。ところで、王安石の老年の詩の情味を、いったい誰が知ろうか。老いて一身を鍾山に投じ、詩文を作ったことは最高の生きざまだ。

一首は、晩年深く政界を引退し、風流の人となった王安石を絶賛したものである。

二首目

霜雪飢腸苦一生

姪^レ禪潤色也多情

多情夜々半山月

吟興胸襟無^レ惠郷

起句は、王安石の鍾山暮らしの暗喩であらう。「霜雪」は王安石が賀客に示した詩句「霜筠雪竹鍾山寺」を縮めたものである。承句の「姪^レ禪」は、禪に深入りしたことを溺れるくらいと形容したもの。転句の「半山」は、半山寺のこと。南京城の東門と蔣山（鍾山、鐘山とも書き、紫金山とも称される）との中間にあるところから半山とした。

王安石の旧宅。結句の「惠郷」は、よくわからない。今は、桃源郷・ユートピアの意とした。しかし、一方で「呂惠卿」のことかもしれないと思う。「呂惠卿」なる人物は、新法の立案にあたった制置三司条例司の一人であり、観^{ちゆうたう}中諱の「贊王荊公」詩にその名が見える。そして、もしそうであれば、結句は、「詩を口ずさむ胸の中には、昔の仲間、政治家時代のことはな」といふ意味にならうか。

——厳しい寒気と甚だしい飢餓とに命を縮め、禪に打ち込み、人生を色どるのも、また風流なことである。夜ごとに半山の月を眺めては、風流に酔いしれ、詩を口ずさんでもその胸中に桃源郷はない。今ここが桃源郷なのだ。

ここでは、禪に傾倒した王安石の風流な日常を詠じている。一休もまた、禪者にして詩人、風流を極めようとした人であった。

三首目

分明分得正兼邪

扶^レ起宗門^レ眞作家

垂示蔣山坐禪榻

打^レ成十八拍胡笳

起句は、革新的な政治家として救国済民のため、新法を次々に成立させた王安石の辣腕ぶりを暗喩したものであろう。「正」は新法党を、「邪」は歐陽修などの旧法党を指していると思われる。承句は、王安石が邸宅を寄進して寺としたり、禪の深い理解者であったことをいうのである。「作家」とは、禪語で、すぐれた働きのある人の意。転句の「蔣山」は、山の名。その山麓に王安石は住んだ。ここは蔣山（太平興国寺あり）の賛元和尚のこと。転・結句は、宋代臨済宗の僧大慧宗杲（一〇八九—一二六三）の談話集『大恵武庫』の、次の逸話に基づく。

王荊公。一日訪蔣山元禪師。坐間談論品藻古今。山曰。相公口氣逼人。恐著述搜索勞役。心氣不正。何不坐禪體此大事。公從之。一日謂山曰。坐禪實不虧人。余數年要作胡笳十八拍不成。夜坐間已就。山呵呵大笑（『大正新脩大藏經』第四十七卷）

——王荊公は、はつきりと正邪を分かつことのできる人だった。禪宗を助け起こした真の作家である。蔣山の賛元和尚に見えて坐禪を教えられ、あの「胡笳十八拍」という詩を作った。

三首目は総括である。政治家にして詩人、禪者でもあった王安石を、賛嘆を込めてうたいあげた。一休の昂揚した、熱い心が「分明二分チ得タリ、正ト邪ト 宗門ヲ扶起ス、真ノ作家」といった力強いリズムによつてよく伝わってくる一篇である。

このように見えてくると、一休の連作「賛王荊公 三首」は、伝記的事実や逸話を取り入れて、多面的な王安石の実像に迫ろうとした意欲作だったと言つてもよからう。

それでは、いわゆる五山の詩僧たちは、どのような詩を作っていたか。『翰林五鳳集』には、王安石関係の詩が十三首収められているが、その中の同じく「賛王荊公」と題する三首を見てみよう。

賛王荊公 觀中

雇役經綸九鼎成。趙家王爵贊絲經。
飢腸一夜鍾山雨。躋噉平生呂惠卿。

又 謙岩

先生巨宋股肱臣。法變青苗事々新。
身後聲名藏不得。杜鵑啼斷幾回春。

又 月溪

公寔宋朝經濟臣。相權執巧法皆新。
鍾山投老少知己。雪竹霜松是故人。

違いは一目瞭然であろう。表現は平易、内容は常識的で平板、新味とか奇とするところが見当らない。

それに比べると、同じ「賛王荊公」の詩でも、一休の作品は主知的でいささか難解ではあるが、内容は豊かで奥深く、表現には様々な工夫が見られ、迫力もある。

それはおそらく、一休が王安石の劇的な人生をこの三首に凝縮しようとしたことに由来するのであろう。

テキスト

中本環校註『狂雲集・狂雲詩集自戒集』新撰日本古典文庫五 現代

思潮社

参考文献

加藤周一 柳田聖山『一休』日本の禅語録十二 講談社

清水茂注『王安石』中國詩人選集二集4 岩波書店

佐伯 富『王安石』中公文庫 中央公論社

井波律子『奇人と異才の中国史』岩波新書 岩波書店

西谷啓治 柳田聖山『禅家語録Ⅱ』世界古典文学全集第36巻B 筑

摩書房

『大日本佛教全書翰林五鳳集』

『林間録』国訳禅宗叢書第2巻

『禅林僧宝伝』大正新修大藏経第四十七巻

『臨川先生文集』巻第三十五 名古屋市蓬左文庫蔵